



文樂の演出

千 田 是 也

文樂の人形操りといふものを、私はほとんど片方の指で數へられる程しか見てゐない。それも偶然の機會に、東京のただつびろい劇場にかゝる引越興行とやらいふものを覗いただけで、本場の文樂といふものを一度も見たことはないのだから、文樂を語る資格は、私にはまるでない。

一番最後に見たのは、戰爭中、新橋演舞場で「寺子屋」や「戀飛脚大和往來」や「關取千兩幟」をやつた時だつたから、これももう四年も前の話である。

だから、細かい印象はもうすっかり忘れてゐるのだが、たつた一つ、その時ひどく感心して今も心にのこつてゐるのは、今の歌舞伎には殆ど見られぬ演出の面白が感じられたことである。美しい一貫した流れの面白さに、その時私は非常に感心した。淨瑠璃には

せて人形を操る文樂を觀て、今更こんなことを云ふのは、まことに迂闊きはまる話ではあるが、私はその時すばらしくドラマチックな音樂をそこに感じた。

これは歌舞伎などでは、今はまつたく感じられぬものなのである。人はよく歌舞伎の音樂性について話すが、今の歌舞伎からは、私は不幸にして、それを感じることは出来ない。なる程、そこには、個々の臺詞の音樂的處理や動作の律動化はある。伴奏としてのお囃子や鳴物もある。だが全體としての音樂的な流れは、今は殆ど感じられない。實にスキだらけアナだらけで、統一ある音樂的な構成、一貫した藝術的計畫などと云ふものは、そこにはまるでなくなつてゐるのである。それはもう、横のまとまりも、縦の流れもない、ひつくりかへされた玩具箱である。わが傳統藝術に精一つばいの敬意を表して、ひつくりかへされた寶石箱とでも云つて置かうか……

だが文樂の人形芝居には——玄人の眼にはどうなのか知らぬが——ともあれ一貫した音樂的な流れの美しさが統一が、演出が感じられる。一人の語手が全段を歌ひまくつて、芝居の流れをリードして行くなどと云ふやり方は、たしかにブリミチーフには違ひないが、ともかくそこには、一筋の貫いた感動の流れがあり、一つの藝術的な計畫があつた。それなくしては眞の戲曲的感銘を生み出すことのできないあの、大事なものが

あつた。

まあ假りに、歌舞伎の「寺子屋」と文樂の「寺子屋」とを比較して見るがよい。前者の場合には、個々のスターのエゴイスチックな藝の見せびらかしが、横の統一の少しもないお家の型の角突き合ひが、芝居全體をひどく散漫な平板なものにしてゐるのに、後者の場合には、ともかくも作者の意圖した軌道から見物の心を少しも外らさせずに、ダンゴン引つばつて行く、美事な、緊密な演出がある。松王_二戸浪_一源藏と移つて行く、あの一分の隙もない、美しい、變化に充ちた情緒音の交錯は、全くこれこそドラマの極致だとさへ、思はせるものを持つてゐる。

歌舞伎は文樂から、あの人形振などと云ふ子供たまりの馬鹿氣たものではなしに、この素晴らしい演出力をこそ學ぶべきだつたと、その時私はつくづく思つた。今更ゴルドン・クレイグの眞似をして、役者に人形になれなぞとは、私はどんな意味からも、毛頭云ふつもりはない。又歌舞伎のデンデン物にみじめな姿でコピリついてゐるチヨボとか云ふものに、文樂の太夫さんの權威をもたせろなども云はない。ただ舞臺に出る生きた歌舞伎役者の一人一人が、あの「書き抜き」と云ふ不思議な紙片ではなく文樂の太夫さんがうやうやしく押戴く、あの正本一冊を、心にしつかり抱きかゝへてゐたら、日本の歌舞伎と云ふものは、もつとも

つと面白いものになつたらうと、残念で仕方ないのである。

新劇は脚本本位の芝居である。これは新劇には役者が、役者の藝がいらないと意味ではなく、役者の藝を感じる餘裕がなくなる程、見物を脚本の方へ引張つて行くことに、いはば、新劇役者の藝があるのである。新劇役者の藝の方向は、脚本の全體的意圖を生かすことに集中される。勿論、劇中の人物と云ふものは、作者の意圖、作者の思想に動かされる人形ではない。それ等は一度作者によつて生み出されたが最後、血の通つた一個の人間として、夫々の生命の法則に従つて生きて行くものである。しかし、さうして各自に生きつつも、なほ、創造主である作者の思想を、作者の心の歌を、一人の語りによつて歌はれるやうによどみなく、聲いっぱいに歌ひつぎ、歌ひ合せて行くのである。さうした役々を體現することが新劇の役者たちの仕事であり、その仕事をたすけ、統一するのが演出の仕事である。

文樂を見物しながら、私は、その演出と云ふものを、その時ふと感じたのであつた。袴を着て、見物の前でしかめ面をしたり、身をくねらしたりする演出家と云ふものは、私には随分奇異には思へたが、しかしともかく、そこには演出と云ふものがあつた。

(俳優座)